Osaka Shoin Women's University Repository

『ふた夜』注解（未定稿）抄

―「初の夜」より―

川口　朗

はじめに

本稿は、鴎外訳『ふた夜』について試みた注解のうち、「初の夜」の部分からその二三を引いたものである。

未定稿とするのは、調査のなお不充分な点が多く、かつテキストは、さしあたって全集（第一巻、昭和四六・十一・二二、岩波書店）に拠ったからである。

『ふた夜』については、稲垣達郎が次のように言う。

『ふた夜』は、鴎外初期翻訳中の佳品である。（中略、川口）『即興詩人』が、その典型であるが、鴎外の翻訳には、原作のいかなるものであるかを問う欲求を自然に解消させている種類のものがある。媒介としての文体が、日本文芸としての独立性に肉薄しているからだと思われる。とりわけ、『水沫集』所収あたりの諸制作にそれがみられるように思う。『ふた夜』もまた、その一篇であると思っている。（岩波文庫『舞姫・うたかたの記 他三篇』解説）

川口もこれに同感である。『ふた夜』は、翻訳というよりも、鴎外の創作とみなしてよいと思う。しかしそれだけに、原文には随分手が加えられているだろうとも思われてくる。そういう点ではやはり、原作に関心が持たれる、あるいはむしろ、原文とその翻訳からできた『ふた夜』との異同を問いたくなるのである。

ここでは、原文との対照から、鴎外の訳語、訳文の中で、多少とも特に眼を惹かれるものをいくつかあげてみる。

この作業をしやすくするために、まず原文の直訳を試みた。その直訳には、幸いに知友吉田正勝氏の御批正を受けることができた。この注解を成し得たのは、ひとえに氏の御教示のおかげである。ここに記して幾重にもお礼を申しあげる。

Osaka Shoin Women's University Repository

ただ、遺憾ながら川口の語学力の不足の結果として、せっかくの御教示を十分に理解咀嚼できず、何彼と誤りの少なくないことを自ら危ぶみ恥じいるのである。

以下次の如く記載する。

○注解個所の本文（第一巻、P三八一～四二一）における所在は、ページを漢数字で、行をアラビア数字で示す。

○全集本文は、

中略、前後の省略は、…で示した。原文の引用の場合も同様にする。固有名詞の傍線は省略する。

漢字の字体は、時に新字体、略字体を用いざるを得なかった。

○原語、原文を示す際、

（　）内は、原文に書かれている語がドイツ語以外の場合の注記、あるいは、川口の訳、その他である。

辞書の訳語をそのまま記す場合は、（　）内には入れない。

1　二三の語句

『ふた夜』が、古典的なスタイルで訳されているため、現在では見慣れなくなったような語句、あるいはまた、どんなドイツ語がそれに相当するのか、好奇心をそそられる語句が少なくない。そのいくつかを挙げてみる。

三八一2　客舎　Hôtel（仏）この語は、例えば他に、『獨逸日記』明治二〇・一〇・六、『瑞西館』等にも見える。しかし、鴎外の初期の文では、Hôtel には、むしろ「客館」が多く当てられている。

三八一4　畫圖に似て…　malerischen 絵のような。

三八一10　安樂窩　dies trauliche Plätzchen（この気らくな、ささやかな場所）

三八二1　恰好し　und dazu（そしてそこへ）。

三八三4　嫋（擧止は…嫋…）　graziös 優美な。　三九一16（嫋なる身を）　ihren schlanken Leib（彼女のすんなりした身体を）。

三八四9　吹角一聲　wie man … und ausmarschirt,（…そして出陣する時）「吹角」は、つの笛。昔、中国の軍中で用いた。そこから、この句を出陣の意味に当てている。

三八五3　余がために…に意（三八五15語）を致せ　Grüß mir…（私から…によろしく）

三八六6　寺の辻　Domplatz ここでは、ミラノの大聖堂の広場を指すと思われる。

三八六15　驢馬　Maulthier 騾馬と書かれている。驢馬は Esel　因みに騾馬は、雄驢馬と雌馬との交配による。

三八七2　鈴聲戛然　die Glocken an denselben stärker klingelten（首の鈴をそこでうんと強く鳴らした）。

三八七14　鶯　（その他三八八、三九〇、三九四、三九五）Nachtigall とある。ウグイス科の小鳥ではあるが、わが国のウグ

イスとは別物である。ヨーロッパの中部から西南部に分布し、低い木立に棲み、春夏の早朝、薄暮、月明の夜などに鳴く。ナイチンゲール、さよなきどり、夜鶯。

三八八1　美妙　das Schöne　美。

三八八2　もろごゑ　Concert　合奏。

三八八9　昔物語の悪霊にも似たるかな　Wie ein finsterer Geist …（不気味な悪魔のように…）とあって、「昔物語」に相当する語は書かれていない。

三八八10　ますぐなる道に委它たる蛇線を作りぬ…　beschrieb auf der Landstraße immerfort eine Schlangenlinie;（街道に絶えず蛇行線を描いた）とあり、「ますぐなる」「委它たる（うねうねと曲がりくねるさま）」に当る語はない。しかしこの語句は、原文の、車が非常な早さで走るために蛇行する様子の表現を、より効果的にしていると思われる。

三九〇3　良夜　die herrliche Nacht　すばらしい夜。

三九〇8　星月夜に照されたる　vom Sternenlicht sanft beglänzt,（星の光にやわらかく照らされて）。

三九二5　黒き辮髪の解けてかゝりたる間　zwischen den aufgelös'ten Flechten des schwarzen Haares（黒い髪のほどけたお下げの間に）。辮、は編んで結んだ髪。

三九三11　色を正して　ernst werdend（真面目になって）

三九四1　かなしきものはなしといへば　es sei schrecklich（恐ろしいことだといわれていますから）。

三九四13　千里の外に去り　so viele, viele Miglien von hier entfernd seid（ここからずっとずっと遠くに去って）。Miglien は、（伊）miglio（マイル）の複数形 miglia と、ドイツ語のマイル Meile の複数形 Meilen との混態であろうか、未詳。

三九七7　強て満足の念をなし、望蜀の心を抑へたり　sich mit den drei Küssen zu begnügen（三度のくちづけで満足すること…）と書かれるのみで、「強て」「望蜀の心云々」は訳出の際の書き添えである。

以上の中で例えば、なぜ「騾馬」を「驢馬」にし（三八六15その他）、あるいは Nachtigall をなぜ単に「鶯」にしてしまったのか、不思議にもなる。鴎外が、騾馬と驢馬との区別、Nachtigall が、日本の鶯とは異なるくらいのことを知らなかったとは思われない。留学中にそれを眼にし、耳にもしていたはずである。しかし当時の日本ではその反対に、ほとんど誰も見たことも聞いたこともなかったであろう（この二種類の動物については、事情は今もそれほど変わりはないのではないか。また、鶯と訳されるのは、これまでむしろ普通であった）。そして鴎外は、そういう事情もまた心得ていたのであろう。そのために、騾馬を、日本人には多少とも眼に浮かべやすそうな驢馬にし、ナハティガールをいっそ鶯にしてしまったかと思われる。いってみれば、文化の相違の認識によるものであろう。

この種の例の一つに、また、馬車に関する訳語が考えられる。

「初の夜」において、馬車の訳語には、「車」が最も多く用いられ、ついで「馬車」、そのほか一例ずつ「番外の郵便馬車」（三九一

Osaka Shoin Women's University Repository

Osaka Shoin Women's University Repository

6)「郵便」(三九六2)と書かれる。

「車」は、多くは Wagen の訳である。しかし、三八二10(行李を載たる車)、三八五14、三八八15の「車」は Calesche 三八五12では Reisecalesche とある。Calesche は、幌付きの軽四輪馬車と説明されるものであり、いまS伯爵はそういう種類の馬車に乗って旅をするのである。

また、三八九5、同12、同16、三九〇9の「車」は、Post すなわち駅馬車、郵便馬車、と書かれている。ただこの中で、三八九5のそれには die Post mit einer Beichaise とあり、Beichaise は、椅子、安楽椅子等の意味が記されるが、ここでこの馬車がどんなものか未詳である。三八九16では…der kaiserlichen Post とある。この kaiserlich の語は三九六2の「郵便」の Post にも付けられているが未詳である。当時、この「カサル、プステルレンゴ」(三八八3)のあたりがオーストリア領であったことと関係があろうか。三八六15、同16の「馬車」は、Equipage(仏)とあり、(豪奢な、御者付きの)馬車、の意である。

しかし、原文ではこのように書き分けられている「車」「馬車」が、それぞれ区別して訳されても、当時の日本の一般の読者には、単に「馬車」という以上にそのイメージに変わりはなかったであろう。

いま一つ例をあげる。S伯爵のフザールの従兵が車上でパイプに火をつける。

すなわち三八六9　ほくちを烟管の皿に點じつ　Der Husar,…legte jetzt den brennenden Schwamm auf die Meerschaumpfeife.(フザールは今や火のついた海綿を海泡石のパイプにのせた)と書かれる。ほくちとして海綿をどのようにして用いるかは未詳。もともと、海綿は日本には産出しないのであり、日本ではほくちの材料にはしなかったであろう。海泡石は粘土鉱物の一種。トルコ、ギリシャ、チェコスロバキア等に産出し、白、クリーム色のものは、パイプその他細工物の材料にされるという。しかしこれは、百科辞典の類からの知識であり、実物は川口は未知、未見である。見たことがあるとしても、それと知ることはなかったであろう。そういう事情は誰にも似たりよったりではなかろうか。ここで原文に忠実に訳されたとしても、それがどんなものか見当もつかないものを持ち出されることになり、訳文は、そのためにかえって耳遠く、まわりくどくなっただけであろう。

以上、少数の例であるが、単語の中には、原文にどのような語が用いられているのか、好奇心を起こさせるものがみられる。これらは、いわば古典的なスタイルで訳した結果であり、意味の上では、原文からそれほど離れてもいない。そして訳文をしばしば簡潔に引き締まったものにしているのである。

また、原文に必ずしも忠実とは言えないように見える訳の中には、つまるところ彼我の文化の相違の認識から来たと思われるものがある。その場合、必ずしも原文に忠実でないことが、むしろ翻訳における描写、記述に不明瞭なものを残さず、具体的に生き生きしたも

Osaka Shoin Women's University Repository

のにしていることを思わせる。

2　内容の変化

訳出の際の、スタイルの上からの、あるいは、文化の相違の認識からの配慮は、語句の範囲にとどまらない。それによって原文の意味内容が変えられていることもある。

例えば、次の、馬車の上の従兵と御者の位置は、改変の目ざましいもののひとつであろう。

三八六8　…向ひに坐を占めし僕は外套を主の膝のあたりに置き、ほくちを烟の皿に點じつ　この訳文では、馬車の車内で、従者であるフザールはS伯爵の向かい側に坐っていることになる。しかし、原文は次のようである。Der Husar, der auf dem Bocke saß, hatte ihm den Mantel um die Füße geschlungen und legte ietzt den brennenden Schwamm auf die Meerschaumpfeife（御者台に坐っていたフザールは、外套を脚のまわりに巻きつけ、そして今や火のついた海綿を海泡石のパイプにのせた）すなわち、従兵は車室の外にある御者台に乗っているのである。末尾の、「カサル、プステルレンゴ」で時を過ごして再び出発する時も　…der Husar nahm seinen Platz auf dem Bocke wieder ein,…（フザールは再び御者台の自分の席につき）とあるのが、ここでも、三九七9、僕は又た向ひの座を占め、と変えられる。この方が、当時の日本人に多少なりとも見慣れている形であり、今日のわれわれにもすぐ眼に浮かぶのである。また従兵は、吹きさらしの御者台に乗るから、外套を、車内の主人ではなく、自分の膝に巻くのである。パイプに火をつけるのも、主人と同室ではないからできるのである。三八五13に、このフザールが主人の乗車を待つ時「伯の外套を臂に掛けたり」とある。ここは Sein Husar stand daneben, mit dem Mantel über dem Arm,…（かれのフザールが、外套を腕に持って、そのそばに立っていた…）とあり、外套は「伯の」とは書かれていない。そして、乗車してからの様子から見れば、この外套はむしろフザール自身のものであろう。「伯の」と訳さないほうがよくはないか。

この後、三八六13に、…馭丁は、僕と語らんとすれど　とある。この「僕と」は、mit dem Husaren auf dem Bock（御者台のフザールと）と書かれている。それを単に「僕と」と訳している限りは、フザールを車内にいることにしたのと矛盾もしない。しかしそれなら、車室外にいる御者が、室内にいるフザールと会話をするのは無理になる。また三八七4のように「『アワンチイ』、『アワンチイ』と僕の叫ぶ」ことも少しおかしくなる。どうしてもフザールが叫ぶのは、車内ではなく、御者台からが似つかわしい。事実、…schrie der Husar auf dem Bocke…（フザールが御者台で叫んだ）と書かれているのである。そして三八八11、猛烈なスピードのため車が蛇行するのに驚いて、「伯が僕は側なる欄を握りぬ」ということになる。これも、… der Husar auf dem Bock hielt sich erstaunt an der Seitenlehne（…御者台のフザールは驚い

Osaka Shoin Women's University Repository

て肘かけにしっかりつかまった…）と書かれているのであり、フザールを車内にいることに変えて訳したことと、辻褄が合いにくくなってしまっている。

それでは、フザールは御者台に御者と並んで坐っていることにもなりそうである。しかし御者は御者台には乗らず、馬の一頭、二列につながれている（二頭立てと思われるが、四頭立て、あるいはそれ以上かもしれない）馬の左側の馬に乗っているのである。まず、出発時の様子では次のようである。

三八六2　馭丁は伊太利流に左の足をあぶみにかけて待ちたりしが、今まや膝もて馬のひはらに一あてあて、一鞭加へつゝ、身を躍らせて脊に上るよと見えしが、　Der Postillon, wie alle italienischen, hatte wartend den linken Fuß in den Bügel gesetzt, gab mit dem Knie dem Sattelgaul einen Stoß, dem Handgaul einen Hieb mit der Peitsche und schwang sich in den Sattel, während die Pferde …（御者は、すべてのイタリアの御者のように、待っている時に、左の脚をあぶみにかけ、膝で左側の馬を一突きし、右側の馬に鞭で一打ちくれ、ひらりと鞍にまたがった。その間に馬は…）鴎外は、ほぼ忠実に訳している。ただ原文では、Sattelgaul 左側の馬、Handgaul 右側の馬、と書き分けられている。御者は当然左側の馬の背に乗ったことになる。（「一突き」するのは右の膝であり、その時御者の足は地を離れ、御者が馬の背中にまたがり終わるまでに、馬は既に走り始めているのであろう。また、右でなく左側の馬に乗るということは、今日のヨーロッパの大陸と同様、既に右側通行が行われていたのであろうか。なお未詳）また途中では、別の御者になるが、三八八7馭丁は鞍に上るよと見る間に…　同8かれが白馬の脊にあるさまは、kaum saß der Postillon im Sattel, … hing er auf den weißen Pferden, …（御者は鞍に坐るやいなや…白い馬の上にかぶさり）とあり、右と同様である。すなわち、馬車の進行中は、伯爵は車内、御者は左側の馬上、従兵のフザールは御者台に乗っているのである。それを鴎外は、今もわれわれの眼に浮かぶように、従兵を車内で伯爵に向かい合って坐っているように変えたのである。しかも、その後の従兵の振舞は、原文に忠実に訳したため、辻褄が合わないことになった。

また次のような例がある。

三九七9～15　…馭丁はこの時一聲喇叭を吹きたるが、此聲、此曲、曩に窗の下にて聞きしものにことならず。少女は今いかに。臥床にありてこれを聞き、涙に枕をや濡らすらむ。／嗚呼、思へば少女はこよひのみかは、明日もかの窗に座してこの聲を聞き、慕はしげに窗に對したる岡を望めど、これよりおり来る人はあらじ。少女は同じ境に留まりて、同じ處を望むならん。膝の上なる小児は猶ほ幾週かわが帽を持ちて遊ぶらむ。父は又少女の嫌ふピヤチエンツアの驛長の子を家に伴ふならむ。少女の心の苦は果して眞に此の如くなりき。

「初の夜」の末尾に近い個所である。伯爵は、少女に別れ、再び車上の人となって出発し、御者が、ラッパを吹き鳴らした時のことで

Osaka Shoin Women's University Repository

ある。原文は次のようである。 Der neue Postillon blies auf seinem Horne, und es war derselbe Ton und dasselbe Liedchen, das der Graf vor einer halben Stunde am Fenster drüben gehört. Ob auch sie die Töne wieder vernahm, zitternd auf ihrem Lager, vielleicht die Kissen mit ihren Thränen benetzend? — Ja, sie vernahm sie gewiß heute Nacht, und morgen wieder, an dem offenen Fenster wie heute sitzend, und blickte gewiß sehnsüchtig nach dem Hügel hinauf, von dem er nicht wieder herniederstieg, und sie sah dasselbe alle Tage, immer in derselben Umgebung, und das Bübchen spielte gewiß noch wochenlang mit der Feldmütze, und der Vater brachte wieder und immer wieder den Posthalterssohn von Piacenza ins Haus.

Das war Alles erschrecklich quälend für ihr Herz; …

(新しい御者が、かれのホルンを吹き鳴らした。するとそれは、伯が三十分前に向うの窓際で聞いたのと同じ調子、同じ曲であった。かの女もまた、寝床でふるえながら、もしかすると枕を涙でぬらしながら、その響きをまた聞いたかどうか。そう、かの女はきっと今夜そのホルンに耳を傾け、そして明日また今日のように開けた窓際に座って、そしてきっとその丘を憧れをこめて仰ぎ見た。そこからはかれは二度と下って来なかった。また毎日同じものを、いつも同じ環境で見た。そしてきっと坊やは、まだ何週間かはその軍帽で遊んだ。そして父親はまた、繰り返しピアチェンツアの駅長の息子を家に連れて来た。／それらすべては、かの女の心には恐ろしいほど苦しいものであった)

鴎外の訳は「…濡らすらむ」で段落が切られる。しかし、原文はここでは切らずに続けられ、鴎外訳の「少女の心の苦…」に当る文から段落が改められる。

また、鴎外訳では、「少女は今いかに」以下「伴ふらむ」までの各センテンスはすべて「…らむ」と現在の推量形で終わる。一文だけは「…じ」と打ち消しの推量であるが、これも、現在の推量である。そして、「少女の心の苦…」のセンテンスから過去形になっている。原文はすべて過去形である。

鴎外訳で、「少女は今いかに」から「伴ふならむ」まですべてが、この前後が過去形の中で、現在形になっていることは、この推量をするのが伯爵であり、彼が少女の悲しみ、苦しみを思いやっていることになろう。そのため、例えば、mit der Feldmütze が、「わが帽を」と訳されるのであり、この部分は、伯爵の胸中の独白として二重のかぎ括弧『 』で括られるようなところである。その中で「濡らすらむ」で段落が切られることは、ここまではラッパの音を聞いた時のかれの思いであり、その後は、伯爵がなおも少女の悲しみのくさぐさを想像していることになる。したがって、Das war Alles erschrecklich quälend für ihr Herz; … の個所を「少女の心の苦は果して眞に此の如くなりき」と訳すとき、これは、伯爵の推量が間違いではなく、客観的な事実であったことが、ここ

Osaka Shoin Women's University Repository

で地の文として記述されていることになる。

それに対して、原文では、まずホルンの音を、少女も伯爵と同じように、しかも、もしかすると涙のうちに聞いたかどうかとの推測の形であるが、これ自体が地の文であり、それを肯定して、かの女のその後の様子、身辺の事情を列挙し、gewiß の語とともに、いずれも客観的な過去の事実として記述されるのである。その上で段落を改めて、Das war Alles erschrecklich quälend für ihr Herz; … と記すことは、以上をまとめ、かの女にはすべてが悩みの種であったことをいわば確認するのであり、そしてこれで少女のことは打ち切られ、これ以下は、ラッパの音を聞いてからの伯爵のことになる。… viel besser und angenehmer hatte es der junge Offizier.（その若い士官はずっと具合よくまた快適であった）と、少女とは対照的な伯爵の精神、生活状態が記され、しかもそういう彼に少女がいかなる痕跡を留めたかを記してこの「初の夜」が結ばれるのである。

鴎外の訳でも、結果的には原文とほとんど変わりはないようにも思える。しかしそれにしても、やはり微妙な違いの感じられることは否定できない。

3　会話の形式

鴎外の翻訳における改変にはまた、以下のような会話の形式の改変がある。それも、ひとえに古典的なスタイルで訳したためと思われる。しかし形式の改変が、原文にそれだけ忠実ではない結果として、意味内容に多少なりとも変化をもたらすことも起こってくる。

三八二9～12　「フザアル」の一人いふ。余にして運悪からんには…又何事をか羨まむ。　原文は次のようである。Wenn ich mißgünstig wäre, sagte einer der Husaren, so würde ich dich ungeheuer beneiden, … —— es ist ein beneidenswerthes Loos.（「もしおれが妬ましく思うとするなら」フザールたちの一人が言った、「それなら、おれはお前を非常に羨むだろうが…それは羨望に値する運命だよ」）すなわち、原文の下線、傍線の部分によって二分されている発言が、鴎外訳では一つにまとめられ、傍線の部分はまとめられた言葉の前に置かれている。

もちろん、次のような場合もある。

三八四2～4　汝は参謀本部へこそ。と龍騎兵は云ひて、己れが、片足を前なる椅子の上に載せたり。結構なるかな。…かく云ひて大息し、その時は戦ありて…縦列の間を行かむや　Du willst zum Generalstab, sagte der Dragoner und legte seine Beine auf einen Stuhl, der vor ihm stand; hast Recht, … und bist, fuhr er seufzend fort, bei einer einstigen vielleichtigen Schlacht … brauchst nicht in der staubigen Colonne zu marschiren.（「お前は参謀本部を目指しているのだ」龍騎兵が言った、そして両脚を自分の前にある椅子の上に置いた「お前は正しい、…お前は」彼は嘆息しながら続けた「他日あるかもしれない戦では…ほこりだらけの縦隊で行進する必要はないのだ」）龍騎兵の発言の

Osaka Shoin Women's University Repository

訳は、原文どおりにアンダーラインの個所の地の文で区切られている。

しかし大体において、会話の訳ははじめの例のような形になっている。後の形は少ないようである。

原文では、短い発言は別として、会話の記載は右の引用のような形である。つまり、今発言の部分をA、誰それが言った、というような地の文をx、とすれば、次の形になる。

(a) A_1・x・A_2

発言はA_1とA_2とで一体、Aになる。(川口の管見であるが、この作品と限らず、西洋の小説の会話の記載の形式は、この形が多いのではなかろうか)。なおこの場合、A_1、A_2に「 」に相当する記号がなくても、発言の部分を見誤ることはあまりないように思われる。現に、この作品の原文では、その記号は用いられていない。その結果、字面に目ざわりなものがなく、すっきりした感じがする。

日本の古典(主として平安朝の作品を念頭において、そして畑違いの者の管見から)は、大体次の形が普通になっているように思われる。

(b) x・A

あるいは

(c) A・x

漢文でもおおかたは(b)の形である。かつ、「 」等は用いられず、また会話の個所でも行は改めないのが普通である。なお、xが省略されることもある。

この場合、A、すなわち発言が、(b)ではどこで終わるのか、(c)ではどこから始まるのか判断に迷うことも、往々にして起こってくる(そのために、例えば漢文の試験で、日ク、以下がどこで終わるかを問う設問もできるのである)。

しかし、「 」等がないこともあって、古典の行文は、会話がそれほど目立たず、流れるようになだらかになる。それが、ひいては優美な趣をもたらすのである。このことはかえって、このゆき方を現在に応用した谷崎の『蘆刈』『春琴抄』等の作品をみれば首肯されよう。そこでは、これも古典にならって段落を短く切らないこと、各センテンスがおおむね長いこと、その他の工夫とともに、息の長い、ゆるやかに、悠々と波うつように優美な行文ができ上がり、それがこれらの作品の古典的な雰囲気を支えるのに不可欠な要素になっている。ただ、このような和文、古典的スタイルが、半面では、歯切れのよさ、簡潔、力強さ、等とは無縁であり、往々にしてなよなよと弱々しくなることは否めない。

『ふた夜』の場合、会話は、多くは、右のA_1とA_2とを一つにまとめて(b)あるいは(c)にしている。また「 」は用いない。そして会話と地の文は溶け合うように一体となっている。かつ、Aは、A_1とA_2との和には必ずしもなっていない。しばしば添加、省略、あるいは書き替え等によって整理され圧縮される。その結果、発言は、簡潔達意、引き締まったものになったと思われる。

なお、この添加、省略等々による整理、圧縮は、ひとくちに言って作品全体の訳し方でもある。かつ、他方では、和語のみならず、

Osaka Shoin Women's University Repository

しばしば漢語あるいはそれに近い語の使用、古典的スタイルとはいえ、和文脈よりもむしろ漢文読み下し文を思わせる行文、等によって、訳文は、和文のやわらかに優美な味わいとともに、和文にとかく付きものの冗長さ、弱々しさを脱した、簡潔に引き締まったものを感じさせるのである（ここには、後の『即興詩人』の「国語と漢文とを調和し、雅言と俚辭とを融合せむ」とした意図が連想されるのである）。

なお訳例を挙げる。この作品の後半、プステルレンゴにおける、旅の士官と少女との間のやりとりである。

三九二8～11　さらば君もまたこゝにて馬を待たんとやし玉ふ。　この部分は次のように書かれている。Also der Herr hat keine Pferde bekommen können, sagte das Mädchen, und muß deßhalb warten, bis die von der kaiserlichen Post zurückkommen.（「それでは、あなたは馬が得られなかったのですね」少女が言った、「それだから帝国の駅馬車が帰って来るまで待たねばならないのですね」）アンダーライン、傍線の個所は省略されている。これに続く少女の言葉の中で、

されど父もこの利益なき驛路にて馬の數をまさんとは思はず。

は、かなり整理されまとめられた感じがある。… und will auch keine weiter anschaffen, da das Geschäft überhaupt so wenig einträgt, …（… またこれ以上購入するつもりもありません。この仕事が全然儲からないからです）。

続いて、

この駅路の利をばロヂとピヤチエンツアとにて占むるをいかにせん　… denn es ist hier eine kleine Zwischenstation, Lodi und Piacenza nehmen uns das Beste weg,…（なぜなら、ここは、小さな中間の駅で、ロディとピアチェンツアが私たちの利益を取っていきます）アンダーラインの部分は訳出されず、傍線部に該当する辞句は、原文には見られない、鴎外の添加、しかもなかなか効いた添加である。（Zwischenstation には、わが国の往時の宿駅制における「間の宿」の語が当てはまろうか）。続いて、

母のいましゝ時には、酒店を開きたりしが今はなし。… , wir hatten auch früher, als die Mutter noch lebte, ein kleines Wirthshaus, aber das hat Alles aufgehört; …（私たちも以前、母がまだ生きていた時、小さい食堂を持っていました、しかしすべてそれをやめました）アンダーラインの個所は、鴎外訳では、省略され、あるいは「今はなし」と言い換えるなど、この一節はまとめて簡略にされている。さらに、

父はいふ、この膝の上なるチェッコオが人となるまでは何事をも擴めんとは思はず。若し婿がなさばともかくも。…; Vater sagt, er wolle nichts mehr vergrößern, das könne einmal der kleine Cecco hier in meinem Schooß thun, oder, setzte sie lachend hinzu, der Schwiegersohn.（…父はこう言っています、自分はこれ以上大きくするつもりはない、ここの、私の膝にいる小さいチェッコがそのうちにしてもよい、と。あるいは」かの女は笑いながらつけ加えた、「婿が、と」）アンダーライン、

Osaka Shoin Women's University Repository

傍線の個所は省略されている。すなわち、この四行の訳文では、$A_1 \cdot x_1 \cdot A_2 \cdot x_2 \cdot A_3$ の形の原文から x_1、x_2 が省かれ、A_2 に当る部分が、省略、添加を交えて整理されている。

以下、これに対する士官の問いである。

三九二12　婿とは何人にか。と士官問ひぬ。Der Schwiegersohn? fragte der Offizier, wer ist denn der Schwiegersohn?（「婿」と士官は尋ねた、「婿とは一体誰ですか」）上記の（a）$A_1 \cdot x \cdot A_2$ の形が（c）$A \cdot x$ の形に変えられている。なお、（b）の $x \cdot A$ の形の訳例は、すでに挙げた三八二ページ9行目がそれに当る。

しかし、整理し、簡略化して訳したことが適当であったかどうか、多少疑問の持たれる例もある。

三九四11　さらば、かの人よりもわれと相愛してわが妻とならんことを願ひ玉ふか。と伯はいひつゝ…　Dann würdet Ihr mich vielleicht auch lieber heirathen oder lieben? sagte der Offizier …（「それなら、そなたもたぶん、私と結婚するか、あるいは、私を愛するほうがいいのでしょうか」と士官は言った…）すなわち、heirathen と lieben とを区別し、oder によってそれぞれ別個のこととして並列し、そのどちらかの方が（ピアチェンツァの駅長の息子と結婚するよりも）よいかと問うのである。それを「相愛してわが妻と…」と訳しては、愛と結婚とを、前後の段階があるだけの、一つの行為として一括しているように聞こえる。少女は次のように答える。

三九四13～14　終りにのたまひしことは君が士官にておはせば所詮かなはず、又た始にのたまひしことも明朝千里の外に去り玉はん君なればかひなし。　Das Erste geht nicht, sagte das Mädchen lächelnd, weil Ihr ein Cavalier seid, und das Andere, wenn es ohne das Erste ginge, geht doch nicht, weil ihr ja morgen früh schon so viele, viele Miglien von hier entfernd seid.（「はじめのこと（＝結婚）はできません」少女は笑いながら言った、「なぜなら、あなたは貴族ですから。そして他のこと（＝愛すること）は、はじめのことをせずにそうしようと思うなら、だって駄目でしょう。なぜなら、あなた方は明日早くもうここからずっとずっと遠くに去っていますから」）。訳では、アンダーライン、傍線部は省略されている。das Erste と das Andere とは、士官の言葉の始めに来る heirathen と後の lieben にそれぞれはっきり対応する。鴎外の訳では、「終り」は後者、士官の言う「わが妻とならんこと」結婚を、「始め」は前者、「相愛して」を指すことになる。前者、後者の順は、士官の言葉の訳に対応して、原文における位置とは、これはこれで正確に入れ替わっている。

少女は、結婚は身分の相違で駄目、それかといって、結婚せずに愛することは、彼が旅の人で、明日には遠く去るから駄目、と答える。すなわち、結婚と愛とのそれぞれに対して、それぞれ理由を挙げて不可能を言うのである。少女の答えは、きわめて論理的、明晰である。鴎外の訳では、その前の士官の言葉が、前者あるいは後者と明確に問うように聞こえない。そのため、二人のやりとりはバラ

Osaka Shoin Women's University Repository

ンスを欠くように見えるのである。この場合、士官の言葉は、「相愛してわが妻と」のようにまとめてしまわず、ぜひとも原文に忠実に訳されるべきであった。

このように論理的、明晰な答えから、この少女の利発さが思われてくる。この少女の利発さは、次のようなところからも感じられる。窓の外に士官の歌声を聞きつけて、すぐに灯をおおい、外の暗闇をうかがうところ、士官に向かってする父の営む宿駅の状況の説明、恐らく自分がすることになるはずの愛のない結婚をめぐる「珍しき会話」(三九四4)、なんとかして室内に入ろうとする士官の気配をすぐに察してしまうあたり、いずれもそれである。しかもこの利発な少女が、このやりとりの直後に、一瞬恋の激情に駆られるのであり、それだけその印象も強く鮮やかである。

また、はじめの士官たちの談話もそうであるが、この少女と士官との会話も、少女の身体つき、眼、顔の動きも、活発、軽快である。この少女は利発さとともに、奔放な面にも事欠かない。しかし、鴎外訳では、そういう印象は何としても弱いのである。全体として、上記の訳出の上の工夫にもかかわらず、平明かつ優雅ではあっても、静的、古雅に過ぎる一面を否定できない。このような古典的スタイルを選ぶ限りやむを得ないのであろう。

以上、『ふた夜』の注解のうち、「初の夜」の原文との対照から、個々の語句、内容、会話の形式に関して、それぞれ例を挙げた。これが全般を察するのに必要な最小限度とは毛頭思わない。ほんとは、原文との対照の結果を逐一列挙することが必要だと思う。また注解としては、そのほかの注記も必要である。ただここでは、紙数を過度に私するのを恐れ、原文との対照に限り、かつ、そのうちから比較的説明しやすい例を選んだだけである。

以　上